

未熟な学生に どう対処するのか

東京都立晴海総合高等学校 キャリアカウンセラー

千葉吉裕

多くの大学で、「初年次教育」というものが行われている。その目的や内容、方法はさまざまで、大学ごとに学生の実態を踏まえて行われているようだ。平成20年12月、中央教育審議会より答申された「学士課程教育の構築に向けて」の中で、初年次教育の充実が求められており、その中の参考資料に、初年次教育で何を重点化しているかが示されている。

それによると、初年次教育では「レポート・論文の書き方」「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」「学問や大学教育全般に対する動機付け」「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」「図書館の利用・文献検索の方法」などが重視されている。大学教育を受ける学生に欠かせないスキルと態度を入学当初に身につけさせることによつて、効果的に成長を促し、大学へ適応させよつという試みである。

しかし、改めてその内容を見れば、高等学校の教育で行われている内容だ。高等学校の教育は文部科学省から示される学習指導要領に沿って行われており、国内のすべての高等学校はこれに従っている。現行の学習指導要領では、言語活動の充実が求められており、レポート・論文を書かせることや、発表の学習の機会を促進することになっている。情報も必修科目として全員が学んでおり、情報活用の実践能

力や倫理的な態度などを身につけている。ホームルーム活動の中では、将来に対する動機付けを喚起することになっているし、図書館を積極的に活用することになっている。

大学教員にすれば、入学してくる学生の実情を見ると、以前に比べ、学習意欲も乏しく、目的意識も希薄化しており、人間関係を構築する能力も低い。対応策を考えなければならぬほど厳しい現状があるのだろう。学生を指導する苦勞の多さが、初年次教育導入の背景にあると推察される。高等学校で初年次教育に類する教育が行われていると思っていない大学教員も多いのではなからうか。

問題の解決には原因の追及が欠かせない。以前に比べて異なることを考えれば、18歳人口の減少と入試の多様化により、推薦入試やAO入試で入学する学生が増加していることがあげられる。このことによつて、大学に入りやすくなり大学教育を受けるために必要な能力、態度を備えていない学生を受け入れるようになったから、このような問題が生じているという考えが一般的である。

しかし、いわゆる難関大学という大学でも、同様の問題が生じており、これまで大学に入学することのできなかった学生が大学に入ってくるようになったという考えは、的を射ているとは思えない。一般入試で入学する学生が多い大学でも起こっている現象なの

で、一般入試での入学者の割合を増やせば解決できるとは思えない。学生が未熟になっていることが問題なのであって、学力が低下しているからこのような現象が起こっているとは考えられない。

未熟さの原因は、高等学校での教育が適切に行われていないためなのか、子どもたちの発達に問題があるのかはわからない。しかし、深刻な問題が起こっていることは疑いようがない。この問題は、初年次教育の充実だけで解決できるわけではなく、高校教育の改善、子どもたちの発達を促す家庭教育や地域の教育のあり方も見直す必要がある。

初年次教育の重点内容は、高等学校の学習指導要領の特別活動に記されている内容に一致する点が多く、大学で初年次教育を充実させればさせるほど、大学の高校化につながってしまう。単位制高校など社会人が入学してくる高校もあるがそれはとても希であり、高校に入学してくる社会人はほとんどいない。大学が高校のようになってしまえば、社会人に魅力のない大学になってしまうのだろうか。世界の大学と比べて、社会人の在籍者が少ないと言われる日本の大学はますます社会人が入りにくくなるのではないだろうか。

大学が高校化しないように、まずは、高校で、生徒の発達を考えながら、教育の改善をしていくことがよいと私は思うが、いかがだろうか。